

二〇二二年四月一六日

春眠の手からスマホのこぼれ落ち
紅殻の格子横切るつばくらめ
春昼や急に鳴りだす古時計
日向土手ぐう突き出して蕨伸びる
あちこちに甌穴見せて春の潮
花の茶屋古りて動かぬ水ぐるま
車窓いま大きくカーブ麦青む

二〇二二年四月一五日

寄す波が踝洗ふ潮干狩
宮跡の広しと揚がる雲雀かな
岩燕庇に宿る峡の寺
飛行船さながら進む春の雲
折紙で孫のお守りや菜種梅雨
春暁にうれしい電話會孫生る

二〇二二年四月一四日

揚雲雀声落としつつ虚空へと
高階や視線はいつも春の雲
春宵や買物つひで廻り道
桜蕊払ひて座る加茂づつみ
寿老神袂くすぐる若葉風
むかで獅子舞ふて五箇山春を告ぐ
うぐひすや筈返しに四囲の山
囀れる園に聖火をつなぎけり

二〇二二年四月一三日

敷石の目地を埋めし桜しべ
青き踏む足裏にもどる幼き日
女生徒ら写真撮り合ひ野に遊ぶ
石室の底を埋めし羊齒若葉

豊実

素秀

みきお

隆松

たか子

なつき

なつき

なつき

素秀

明日香

凡士

凡士

凡士

こすもす

はく子

明日香

みきお

満天

あひる

ぼんこ

凡士

明日香

はく子

せいじ

あひる

なつき

なつき

なつき

田一枚埋めし蓮華浄土かな

尖る葉もまるき葉もあり青き踏む

父よりも背の高き子の卒業す

二〇二二年四月一二日

ふく風に薔薇垣匂ふ遊歩

道下萌や芝生養生中と札

花の中仁王は憤怒緩めざる

ほおざしの木箱ひらけば潮の香

風船の空へキリンの首伸びる

遠足の声に膨らむ電車かな

遮断機の降りて閉ざしぬ蝶の道

海苔粗朶を揺らしスピード上ぐ渡船

うららかや渡船に多き二人連れ

二〇二二年四月一日

父の忌の食卓に薔薇挿しにけり

蒲公英や眠る幼の掌の中に

春の雨根分けに増ゆる鉢並べ

玄関を一回りして初燕

恐竜の欠片かと掘る日永かな

花筏川の淀みにひと休み

二〇二二年四月一〇日

春の空引つ張つて行く飛行雲

母が吹き子が追ひかくるしやぼん玉

壺焼きの傾き海をこぼしけり

山守りて海知らぬまま目刺し焼く

囀りの樹下にうたた寝宮大工

こすもす

あひる

みきお

菜々

たか子

はく子

智恵子

凡士

宏虎

素秀

なつき

なつき

なつき

あひる

むべ

なつき

明日香

凡士

智恵子

たか子

せいじ

素秀

みきお

凡士

凡士

凡士

凡士

凡士

凡士

毎日句会みのる選・二〇二二年四月一八日